
原初の悪魔

無名の霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原初の悪魔

【Nコード】

N7774E

【作者名】

無名の霧

【あらすじ】

男は悪魔と契約した。悪魔は男の「心」を要求し、男は悪魔から「幸福」を授かった。「心」とは人間性であり、男は「幸福」に興じた瞬間から「心」を破棄し、幸福な「獣」となった。悪魔は「心」を手に入れる。

(前書き)

夏ホラー2008、参加作品でございます。

男は悪魔と契約した。

悪魔は男の「心」を要求し、男は悪魔から「幸福」を授かった。

「心」とは人間性であり、男は「幸福」に興じた瞬間から「心」を破棄し、幸福な「獣」となった。

悪魔は「心」を手に入れる。

人生に、大きな、しかも突然の転機が訪れるとしたら、それは人の生か死であろう。

人生に於いて、大切なことは何か。

例えば、正義、博愛。自分と言う個人に課せられた、何か運命的な使命を全うすることか。

例えば、享樂、墮落。自分と言う個人の中で発生した、刹那的な快樂を貪り続けることか。

例えば、富、名声。自分と言う個人を、死して尚永遠として存続することか。

何れにせよ、避けられない「死」を見据え、その瞬間迄に何を成すべきか、ということだ。

いずれ死していく自分という儚い存在に、何かしらの重要な意味を持たせたいのか。

いずれ死して行くのだからこそ、それまでに生を快樂で以って謳歌したいのか。

いずれ死する自らに、永遠性を付加したいのか。

人間だけが「死」を理解する生物である以上、人間たる証として、「死」を見据えて人生を送ることは間違ではない。それこそが、霊長の最たる人間の、その存在を「動物」と異にする点であるからだ。

「死」を見据えて生きるとは、ある種、人間としての尊厳であり、同時に「本能」を超えた「自我」に依るものといえるだろう。

——そう。人間は、「人間」であるが故に、「自我」を愛し「本能」を嫌悪する。

何もおかしいことはない。「自我」こそが「人間」足り得るのだから。

「自我」を否定すれば、「人間」は「獣」に成り下がる。

「本能」に順ずる「獣」ではなく、「自我」に順ずる「人間」であるべきなのだ。

「本能」は性質であり、個ではないのだから。

人生に於いて大切なことは何か。

私はただひたすらに、富と名声を追い求めた。

いずれ死ぬものなれば、それまでに、何か大事を成し遂げたい。誰もが思うことであろう。おかしいことではない、自らの特別性を願うことは。

自分は特別である。それを証明するために、私は富と名声を追い

求めた。富は私の生活が一般人のそれとは違うことを証明し、名声は私の存在が一般人のそれとは違うことを証明した。富と名声を集めれば集めるほど、自分と言う存在が特別なものへと昇華していく。「自分」というものを、確たるものにするために。私はただひたすらに、富と名声を追い求めた。

私には誇りがあった。

自分は特別なのだ、一般大衆とは違うのだと言う誇りがあった。ただひたすらに、毎日を生きるだけの、「動物」のような彼等とは違い、自分は優れた「人間」なのだ。

他人を欺き、より多くの富を手にしたとき、その富は私がどれだけ優れた「人間」なのかを証明する。

才能ある自分は、愚かな彼等とは違うのだ。

私には誇りがあった。

勝つか負けるか。

世界は白と黒の二色だ。

私は全てを手に入れた。

富。名声。それらは私に優越感と誇りを与えてくれた。

やがて私は結婚した。

なかなか見つからぬ、目も覚める美女だ。私は彼女に最高の生活を送らせた。

私の掻き集めた富と名声は、彼女に何一つとして不自由の無い生活に約束した。

彼女は、私と一緒にいたいと言った。

だがしかし、それは無理な話だ。

何故ならば、私はより多くの富と名声を集めるために仕事をせね

ばならず、その仕事は多岐に渡っていた。

彼女の願いは可能な限り聞き請けたいが、仕事を削るわけにはいかぬ。

それこそが、私の証明であるのだから。

私は私であるために、より多くの富と名声を集めねばならぬ。

私は、彼女が寂しく思わずに済むよう、より多くの金を渡した。私は自我に従う。愛には執着せぬ。

大切なことは富と名声。私を私足らしめるものは仕事である。

人生に、大きな、しかも突然の転機が訪れるとしたら、それは人の生か死であろう。

やがて、妻は私の子供を孕んだ。

私は妻を、最高の病院の、最高の部屋へと入院させた。

私は仕事を続ける。

富と名声は私を証明し続けた。

そうして私が仕事に――富と名声を集めるのに――明け暮れていると、一つの喜ばしい報せが舞い込んだ。

妻が遂に産気付いた。

私はそれを祝福し、仕事のスケジュールに目を通す。

手帳には、ビッシリと予定が詰まっていた。

致し方あるまい。出産には間に合わぬかもしれぬが、出来得る限り仕事を早急に終わらせ、病院に向かおう。

案の定、と言うべきなのだろう、私は出産には間に合わなかった。飛行機を降り、タクシーを捕まえたところで妻の出産が終わったという連絡が入った。

妻は無事に、我が子を産み落としたらしい。

出産に間に合わなかったのは残念だが、仕方が無い。

そこで私は、運転手に行き先の変更を告げた。

私は花屋で有りっ丈の花を買って行くことにした。

思えば、私は何かに取り付かれていたのかもしれぬ。

富と名誉を掻き集め、仕事に明け暮れる日々。

愛する妻を一人残し、仕事に明け暮れる日々。

遂には、愛する我が子の誕生にも間に合わなかった。

本当に、自分にとって最も大切なことは仕事なのか？

富と名声がそれほどまでに重要なのか？

——私にとって、最も大切なものは何か？

私の中に、名状し難い感情が沸き起こった。

有りっ丈の薔薇をかき集め、代金を遥かに超える金を気前よく店主に握らせ、私は病院へと向かった。

最高級のスーツで、最高級の革靴で、有りっ丈の薔薇を抱えて病院へ……妻と我が子の待つ病室へと向かった。

我が子は眠っていた。

我が子ながら、その未だ人とは言えない様な「動物」的な容姿を見て、しかし私はそれを愛おしく感じ、思考は緩やかに停止した。

折角の薔薇も、タクシーの中で考えていた祝いの決め台詞も、何もかも頭から消失せしめた。

私は我が子を抱きかかえる。
私は――震えた。

世界が激変した。

白と黒の世界が、色付いた。
世界は、美しい。

その後、私は手掛けていた仕事の多くを手放した。
それなりに裕福な生活が営める程度に抑え、そこから創出した時間
のほとんどを妻と我が子と過ごした。

当然、妻は喜んだ。

嗚呼、喜ぶ妻と、天使のように微笑む我が子と過ごす時間の何と
素晴らしいことか。

天使の微笑み。天使の囁き。天使の眼差し。

やがて、妻と我が子連れて病院を後にするとき、妻が私に言った。
た。

「これから、二人で大切に育てていきましょうね」

私は誓った。

私には、何よりもこの子が大切だ。

私たちの未来は、我が子の為にこそ――。

周囲も私の心境の変化に驚いていた。

人前ではほとんど笑うこともなかった私が、我が子の前では微笑んでいる。

他人に触れることすら許さなかった私が、スーツに皺が付くことも厭わず我が子を抱く。

まして、我が子にその唾液でスーツを汚されても顔を不快に歪めることすらない、と。

挙句の果てには、異様な執着を見せていた仕事の大半を切り捨てるとは――。

構わない。

私は、我が子が愛しい。

狂おしいまでに愛しいのだ。

富や名声を求めるのに明け暮れていたあの時期の、何と愚かなことか。

白と黒の世界に生きていたあの時期の、何と愚かなことか。

自らの証明は我が子。

世界は彩られ、これほどまでに美しい。

自宅にいる時間が増え、妻も明るくなった。

我が子を抱き、私に微笑む。

私我が子を抱くと、天使の眼差しが私を射抜き、微笑む。

笑い声も泣き声も、嗚呼、心地の良い天使の歌声。

私は幸福だった。

幾らかの富と名声を失って尚、幸福であった。

そう、富や名声といった、俗な幸せを放棄することで、より美しい幸福の次元を手に入れたのだ。

今の私は、我が子のためならば、総ての財を捨てられよう。

それほどまでに、狂おしく愛しい。

妻もそう思っているのだろう。

我が子のためならば、自らの命すらも投げ打って構わないと。

私は手がけていた事業の多くを手放したことによって、残った事業の関係者とも親しくなった。

彼らは、今の私を気に入ったようで、以前のように遠巻きから恐々と覗くようなことはなくなった。

友人は多いに越したことはないのだ。

敵を作ることとは得策ではない。

ましてや、幾らかの富の為に他人を陥れて敵を作るなど――。

彼らは口を揃えて言った。

「変わりましたね」

私の中に、名状し難い感情が沸き起こった。

私は、「変わった」。

私は、「変わった」のか――？

私は幸福だったが、そんな私を悪魔は見逃さなかった。
今まで散々他人を欺き陥れてきた私を、神は救わなかった。

それはある日突然に。

我が業を裁きし神の御業か。

我が業を見込みし悪魔の所業か。

誘拐。

妻が目を離れた一瞬間の間に、愛する我が子は消失した。

神隠し。

すぐに電話があった。

誘拐犯を名乗った。

要求は金。

額面は大きい。

私の築き上げてきた財を以ってせねばならぬ、巨額。

迷いなどありはせぬ。

即座に了承した。

私たちは知っている。

我が子は財には代えられないことを。

我が子是我々にとって、必要不可欠な存在であることを。
そう。必要不可欠な――。

警察など呼ばぬ。

金など惜しまぬ。

我が子さえ取り戻せれば。

誘拐犯を捕まえようなどとは思わぬ。

我が子さえ取り戻せれば。

要求通りに金を渡すと、すぐに我が子は帰って来た。

私たちは歓喜した。

生活は苦しくなる。

裕福な生活は難しい。

しかし、我が子の為と思うと、後悔はない。

また電話があった。

誘拐犯と名乗った。

咄嗟に我が子の姿を追う。

我が子は妻が抱いていた。

ならば。

用件は何だというのか――。

「お子さんは元気ですか？」

我が子は今、妻に抱かれ笑っている。

何の用だというのか。

「少し……お聞きしたいことがあります」

私は黙って先を促す。

「いつも、いつも思うのですが、貴方がたはどうして、そう……どうして、子供の為に金を払うのですか？」

嗚呼、この男は知らないのか。

我が子というものの価値を。

「貴方がたにとって、子供とは何なのですか？」

我が子は我が子。

愛しき我が子。

理由などない。

我が子は我が子で、愛しい我が子なのだ。

それが、今の私の存在――。

我が子が、必要不可欠な――。

「貴方がたは、子供の為に金を作り、子供の為に金を払う」

私の中に、名状し難い感情が沸き起こった。

これ以上、この男の話を聴いてはならぬ。

受話器を置こうとする。

我が子が、私に向かって天使の如き微笑を浮かべている。

――我が子よ、何故に微笑む。

「……変わっている」

変わっている？

私は、「変わった」。

私は、「変わった」のか――？

悪魔が、死神が、私の背後で微笑んでいる。

私の心が悲鳴を上げる。

我が子が、私に向かって天使の微笑を浮かべている。

私は、その微笑から目が離せなくなった。

――我が子よ。何故に微笑む。

「子供の為に金を稼ぎ、子供の為に時間を割く。子供の為に生きる。

子供の為に。子供の為に。そう、子供の為に――。まるで……」

男が言った。

「まるで、そう――家畜だ」

通話は途切れた。

受話器からは、無機質な電子音が響いていた。

我が子が嗤っていた。
——我が子よ。何故に……嘲る。

私は——震えた。

世界が激変した。

世界が、色褪せた。

世界は、白と黒。

人生に、大きな、しかも突然の転機が訪れるとしたら、それは人の生か死であろう。

私は気づいてしまった。

そう。

私は、「変わった」のだ。

私は、「変えられた」のだ。

愛する我が子によって。

愛する我が子を守り、育てるための存在へと。

我が子の為に金を稼ぎ。

我が子の為に金を払う。

まるで、家畜だ。

家畜。「獣」。

私の、我が子への愛情は何だったのか。

私は、確かに愛していたはずだ。

以前の私を塗潰す程に。

世界が色付く程に。

私は、我が子を愛していたはずだ。

私が、「変わる」程に。

しかし。

しかし仮にも。

これは……「父」としての「本能」ではあるまいか？

私が、人が内包している「本能」――。

生得的本能。「獣」。

「私」は、どこに行った？

世界は変わった。

色付いていた。

――我が子によって。

その時すでに、「私」はいなくなったのか。

「本能」を揺さぶられ、引きずり出され、我が子を守る忠実な下僕

へと――。

我が子が必要不可欠とし守る、我が子の「環境」へと。

「私」を粉微塵に吹き飛ばしたのか。

私の「人間」たる「自我」を侵食し、「本能」の「獣」へと。

我が子を見やる。

微笑んでいた。

愛しいと感じた。

天使の微笑み。天使の囁き。天使の眼差し。

私は愛しいと感じた。
しかし。

——悪魔。

愛おしい、この感情すらも偽り。
「本能」。

「獣」の性。

嗚呼、総ては偽り、泡沫の夢。

我が子を見やる。

嘲っていた。

憎い。

悪魔の微笑み。セイレーンの歌声。バロルの眼差し。
憎い。

——悪魔。

私は気付いた。

そうだ、違う。

私は、家畜ではない。

「獣」ではない。

「人」なのだ。

私は「変えられた」。

妻は気付いておらぬ。

自分が、「変えられた」ことに。

すべての今が、偽りであることに。

その愛情が、作り物であることに。

悪魔の家畜になっていることに。

私は、気付いた。

これは原初のシステム。

種の為に、「人間（自我）」を「親（本能）」に変え、子を育てる為に仕掛けられていた原初の罠。

子供とは、原初の「本能」^{ワナ}を引き釣り出し、「人間」を奪い「獣」にし、「人間」になる自らを育ませる悪魔であったか。

悪魔は私の「人間」を我が物にしようとしている。

私は、気付いてしまったのだ。

人生に、大きな、しかも突然の転機が訪れるとしたら、それは人の生か死であろう。

私は悪魔に手をかけていた。

今一度、私が変わるために――。

愛おしい首筋を、「獣」が締め上げる。

私は、「人」になる。

悪魔がもがいた。

私を魅了して止まぬセイレーンが喚く。

「私」を殺し続けるバロールが睨む。

哀れな妻が私の腕を抑える。

哀れな妻が喚いている。

――深く、虜にされている。

――待っている、今救い出してやる。

悪魔が私に訴える。

偽りの私が、私に挑み掛かる。

「獣」に戻ってなるものか。

私は、「人」になる。

やがて、悪魔は息絶えた。
もう悪魔は微笑まない。
セイレーンは歌わない。
バロルの瞳は閉じられた。

妻は狂った。

呆然と悪魔を抱き上げ、あやす。
無表情に、ただ呆然と、悪魔を抱く。

動かぬ悪魔に、乳を飲ませる。
妻は狂った。

嗚呼、気付くのが遅かったか。

既に、手遅れだった。

妻は完全に悪魔に憑かれていた。

悪魔の虜になっていた。

死して尚妻を縛り付ける悪魔を憎悪し、私は妻に近づいた。

今、楽にしてやる。

愛しいお前を、「獣」のままにはせぬ。

偽りから開放してやる。

嗚呼、妻よ、もう少し早く気づいていれば。

悪魔に心売り渡すことなどなかったものを。

私は妻の首に手をかけた。

——嗚呼、時よ。止まれ、お前は美しかった。

契約は終わった。

心売り渡し、偽りの幸福を手に入れ、悪魔の下僕となる。

契約は終わった。

私は悪魔に打ち勝った。

何故だろう。

鏡に映った私の顔は、酷く歪んでいる。

瞳から頬へ、雫が伝う。

偽りの夢は醒めたというのに、私の心は悲しみに冷たい。

鏡に映る瞳には、悲しみ、絶望、狂気――。

嗚呼、そうか。

そういうことか。

もう、私も手遅れだったのだ。

悪魔に売り渡した心は帰ってこない。

すでに私の心は……「人間」の心は、自らによっても侵食されていたのか。

「獣」の本能――原初の悪魔によって、私の……「人間」、は。

私は書斎の引き出しを開ける。

黒光りする「神」を取り出す。

唯一私を救い給う、デウス・エクス・マキナ機械仕掛けの神。

全てを終える、終幕の一撃。

撃鉄を打ち下ろす。

神が雄叫びを上げ、私のこめかみを撃抜いた。

——悲しいかな。最後に想ったものは、あの忌々しい悪魔の愛しい
笑いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7774e/>

原初の悪魔

2010年10月11日18時08分発行